海蝶ノヘイ 19

吉川英梨

海保大で「女性保安官の白い制服姿を描きたいな」

拙著『海蝶』の第一章の冒頭は、元特殊救難隊員で潜水士としての引退が近づいている八潮剣という人物の視点で始まります。広島県呉市を走るハイヤーがY字路を曲がり、あとはくねった一本道をひた走る――。

そう、海上保安大学校への道のりです。

2019年８月某日、練習船こじまの帰港式があると聞いて、私は呉に単身、乗り込みました。『海蝶』第一章の八潮と同じ景色を眺めながら、私の乗ったタクシーは正門を抜けました。本館が見えてきたとき、学校関係者の方々が白の第二種制服姿で背筋を伸ばし誰かを待ち構えている姿が見えました。

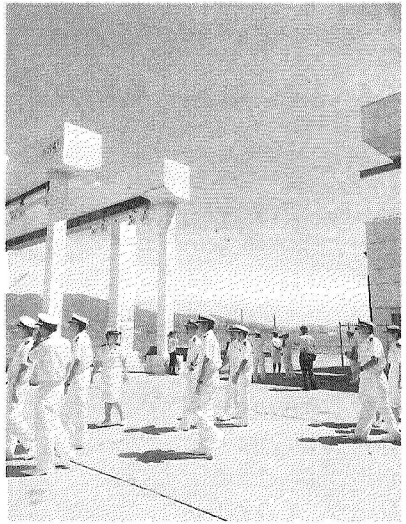
（誰か偉い人を待っているのかしら。白い制服姿、かっこいいなぁ）

と思っていたら、タクシーが彼らの前で停車。「吉川先生ですね！」と彼らから敬礼を受けてびっくりです。

これまでの各施設の訪問では、仕事中のみなさんの邪魔にならぬようにひっそりと施設内に入るという感じだったので、こんな仰々しいお迎えは初めてです。

直後に練習船こじまの式典があるから流れでこうなっただけなのですが、「私なぞのために」と恐縮しきりです。日差しの強い暑い日だったので、こちらはノースリーブにサングラス（オシャレ用のサングラスではなく、目を酷使する職業なので強い日差しは大敵なのです）だったこともあり、恥ずかしいやらなんやら……。

自分がそんな恰好だったからか、あの真っ白な第二種制服姿には惚れ惚れしました。目の前に広がる瀬戸内の海の青さとよくマッチしていて神々しいほどです。



白い制服姿に惚れ惚れ

練習船こじま帰港式会場に入ると、ここにも白い制服姿の学生さんたちがずらり。みじろぎひとつせず式典が始まるのを待っている様は圧巻でした。なかでも、真紅の口紅を引き、真っ白のパンプスできびきびと歩く女性海上保安官の姿に見惚れてしまいました。まだまだこのころ『海蝶』は構想もできていないときでしたが、（主人公を女性海上保安官にして、白い制服姿のシーンを出したいなぁ）と思ったのを覚えています。

練習船こじまの世界一周については、テレビの密着取材番組を見た覚えがありました。100日間、２万6000海里というのは世界の海上保安組織の実習船でも例のない遠洋実習だということを、のちに下野浩司校長から教えてもらいました。船に乗っている乗組員や研修生の方も大変でしょうが、無事帰港するかどうか、学校に残っている関係者の方々も非常に気を揉みながら送り出しているのですね。

余談ですが、海上保安庁の話を講談社で書くと決まったとき、担当編集から「ミステリにしてほしい」とオーダーがありました。

それなら「練習船こじまの世界一周実習中に船内で密室殺人が起こるとかどうですか。船って密室が多いので盛り上がりますよ！」と提案したところ、編集担当から速攻で却下（笑）。

いまから考えれば、海上保安庁を舞台にした第一作目が巡視船内の密室殺人じゃなくてよかったと思いますが（いったい誰が殺されるのか!?）いつか書いてみたいなぁという気持ちがちょっと残っていたりします。その時はどなたか海上保安官の方に犠牲になってもらうことに……。

（海上保安大学校取材の話は次回に続きます）

＝次回は５月20日号

練習船こじまで密室殺人…犠牲者役になる人募集？